

人類史とサニテーション ——カメルーン狩猟採集民の事例より

林 耕次 (地球研プロジェクト研究員) ほか2名

現在、世界では約24億人の人々が適切なサニテーションにアクセスできていない、という報告があります。また、約10億人の人々が、日常的な野外排泄をしているという報告があります。これからポスターで発表する内容は、私が長年研究していたアフリカの熱帯のカメルーンという所の、バカビグミーといわれる狩猟採集民です。彼らの生活の中から、実際トイレというものがどういう風に捉えられているのか、どういうところでやってるのか、ということを経験したものを経験したものをポスターでまとめました。

彼らの生活空間ではですね、現在、狩猟採集民といっても1950年代以降に定住化政策が進みまして、このような住居に住んでいることが多いんですけど、一方で季節に応じて長期で森に入って、そこで森の資源に頼った生活を営むということで、写真にある通りの生活をしております。

トイレなんですけれども、彼らはいわゆる特定のトイレというものを持っていないんですね。つまりは、どこでもトイレだと、ということも言えるかと思いますが。詳しくはポスターの内容で見ていただきたいんですけども、現在カメルーン東部州において、定住化が進んで集住化が進むと。都市なんかでもですね、人が集まるとトイレが必要になってくる、ということで、いろんな問題が発生しています。

そんな中で、ピグミーの人々の生活習慣を見ながら、人類史においてですね、サニテーション、トイレの問題というものがどのように扱われてきたのかということ、これからまた追求していきたいと思っております。

サニテーションプロジェクトのリーフレット、ポスター前に置いていますので、どうぞご自由にお取り下さい。発表を終わります。



第9回地球研究東京セミナー
2018年12月27日、東京大学

人類史とサニテーション —カメルーン狩猟採集民の事例より—

林 精次¹, 中尾 世治², 山内 太郎²

1. 総合地球環境学研究所, 2. 北海道大学大学院保健科学研究院

【目的】 現在、世界では約24億人の人々が適切なサニテーションにアクセスできておらず（国連レポート、2017）、約10億人が日常的な糞尿処理をしていると報告されているように（WHO/UNICEF）、トイレを含むサニテーションの問題解決は緊急の課題となっている。本研究対象とするカメルーン南東部の狩猟採集民に住むピグミー系狩猟採集民（Baka）の人々は、獲食、遊戯活動を行う定住生活を主体としているが、定住化以前である1990年代まで続けた未定住での移動生活も観察におこなっている。これらのライフスタイルにおいて特定の「トイレ」を持たず、積極的に使用することがない。彼らの日常生活から、トイレやサニテーションに関する現状を調査し、その文化や価値観が維持される環境要因と、今後の課題について解説する。また、『人類史におけるサニテーション』という問題設定を見込んで、「人類にとってのトイレ」という観点から多角的に議論を発展させたい。

【方法】 本研究では、野外観察の調査結果より、カメルーン共和国東部のN村に暮らすババ族の集落（N=16）を対象として、時間配分と活動空間について分析した。調査では、ひとりで1日ずつ、朝の6時から晩の18時まで（計720分）集落から北西に約10km離れた森林キャンプにおける活動内容と時間を記録した（2005年10月4日から10月12日に実施）。また、定住集落でのトイレ、サニテーション事情を定住の都市部の状況と踏まえて検証した。



表1. 調査対象者16名の活動内容と所要時間

活動カテゴリ	男性 (N=8)	女性 (N=8)	平均	
平均	標準偏差	平均	標準偏差	
狩猟	19	24	6	10.04
採集	132	69	137	53 NS
移動 (森林内時)	150	65	100	58 NS
休憩 (森林内時)	72	62	22	14 0.04
家畜活動	14	17	28	18 NS
調理	7	9	63	27 <0.0001
製作・加工	30	27	64	53 NS
散歩	21	7	48	39 NS
コミュニケーション	28	11	30	NS
個人的活動	18	11	14	NS
睡眠	7	3	6	12 NS
休憩 (キャンプ内)	181	88	205	109 NS
移動 (キャンプ内)	8	8	6	7 0.02
合計 (時)	720	720		

- 【結果と考察】**
1. 活動内容の項目別時間配分におけるサニテーション：調査中の活動として狩猟行為を含むサニテーションに費やす時間は「個人の活動」内に分類した（表1）。対象者16名の狩猟行為に占める割合は、60%程度、いずれも数分程度であった。時間割も様々で、「したいときにすぐ行く」でよい。→**個人の時間配分は意識しなかつた。**
 2. 活動空間からみるサニテーション：図1、3のようにベータスキャンプ近く、あるいは特定の活動中（木の穴探検、ヤムイヤ採集等）、移動中に用いている。一人1日1回近く活動範囲が分散されるため、集約的に問題とならず。
 3. 森林キャンプの活動と定住集落での活動：本研究では詳細なデータの明細がないが、定住集落でもババの人々は特定のトイレを持たず、集落の奥手奥の隙、森への移動中に用いている。→**遊戯活動時は集落トイレを必ず使う。**
 4. 文化と価値観：2006年の手帳調査では、「（糞尿を一面に集める）トイレは不要だ」という回答があった。→**意識の面からは、トイレに関する概念が希薄。**



【課題と今後の課題】 本研究における森林のキャンプや定住集落では、人口密度が比較的低い、環境要因も含めて衛生環境の分散性が傾向としてある。そのため、「特定のトイレを必要としない」という仮説が浮かび、個人の概念や価値観が異なる。これを人類史とトイレの関係を追究する上で有効とした。追復行において、ヒトの居住性と都市化に伴うサニテーションの問題は不可欠であり、新たなデザインを提案することで解決に動き始める必要がある。

